

四條畷学園女短大 中島 清子

1. 襲色目は平安時代の襲装束にみられる色目で、桜重・柳重・山吹重等とよび、襲着のために重なる衣の表の色の調和や、1枚の衣の表裏の配色をさしている。今日、日本の伝統色としても屢々平安朝のこれらの色がとりあげられているが、それは、その色調のもつ感情が今日の我々の心をひき、その色調のかもしだす雰囲気は千年来の伝統の中に育くまれつつ我々の中に流れて、尚、共通の風土にその情緒をただよわせているからであろう。これらの襲色目は、いうまでもなく平安貴族社会を背景に生まれ得たものであるが、その後、どのように継承されてゆくのであろうか。

2. 源氏物語・源氏物語絵巻に襲色目を眺め、その内的な意味を考慮しつつその推移をみる時、武士の用いた威色目にその展開をみる事が可能であろう。源平盛衰記・平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞にみられる威を資料として、その過程の考察を試みた。

3. 平安貴族の盛期をすぎた十二世紀後半には、平氏・源氏に代表される新しい勢力が文化の担い手としてあらわれ王朝文化に接したが、襲色目的な感覚は、武士によっては威色目に強調されていると思われる。そして、それは平安貴族のそのものではなく、武士的世界の美感の集約として表出されたものと考えられよう。